学童保育指導員研修における講師活動の報告（４）

—「現代子ども論」の講義（人間関係・若者文化・メディア・性教育を中心に）—

玉木　博章

愛知みずほ大学 (非常勤講師)

Hiroaki TAMAKI

Aichi Mizuho College（Part-time lecturer）

キーワード：人間関係；コミュニケーション；若者文化；メディア；性教育

１、はじめに

筆者は 2015 年より学童保育指導員研修の講師を毎年務めている。内容は主に地域別で開かれる年１～２回の学童保育指導員学校の講師と、年数回の学童保育指導員資格取得やキャリアップに関わる講習の講師とに分けられる。本稿では2019年度に筆者が務めたNPO学童保育指導員協会主催の学童保育指導員研修における専門研修[1]での２回分の講義「現代子ども論」のうち、２日目に行った「人間関係と子ども世界（主に子どもの人間関係、若者文化、メディア、性教育について）」（120 分）に関する講義の講師活動の内容を報告する。まずは表１に日程記録と詳細を示した。また表２を当日に資料として配布している。表２は、報告（２）に添付したもの[1)]を数項目で加筆修正した内容になっている。なお２回分の講義のうち初日は、報告（１）の内容[2)]を講義している。

表１　講師活動の日程と内容の詳細

日時	地域	テーマ	会場
9 月 27 日	愛知県名古屋市	学校化社会と自己肯定感	労働会館本館
10 月 4 日	愛知県名古屋市	人間関係と子ども世界	労働会館本館

２日目の講義の序盤は、報告（２）と同様に、資料を用いて社会や時代背景の変化を旧時代と比較して説明した。重複するため詳述は避けるが、報告（２）を基にしながら端的にまとめたい。

社会学者の Z.バウマン[3)]をはじめ、A.ギデンズ[4)]、U.ベック[5)]らが口を揃えて現代を２つの時代に分けている。日本でも、グローバル化のなかでバブル経済の破綻からの脱却を目指す日本経団連が打ち出した「新時代の『日本的経営』」や規制緩和等に影響され、バウマンらが論じるように不安定で変化の生じやすい様相となった。日本企業もバブル期と異なり、グローバル企業と戦うため、労働力のコストパフォーマンスを精査せざるを得ない状況になった。それは経済が国内のみで循環していた鎌倉時代の元寇後、御家人達に分配する領土を失くしてジリ貧状態になった幕府と、御恩と奉公の不成立を嘆く御家人達の様相に類似する[6)]。また、時代変化を項目別に分けると表２のようになる。

特にライフコースを例えた場合に、報告（２）では目的地へ各駅停車の電車で行くか、車で行くかという違いで表現した[6)]が、道無き道を行く、または荒れた道を進むという点を鑑みると、現代は航海にも例えられる。海では、進行方向もわからず、いつ転覆するかわからない天候の危険や、いつ補給できるかわからない不安を孕み、目的地に着くかどうかは人生という航海の舵を取る責任を背負った個人の力量に委ねられる。

また車同様に、どのような仕様の機体に乗れるかどうかは親の経済力で左右される。貧富の二極化が生じた現代では、最新式のナビを装備した車に、食料や必要機材持ち込んで、快適に高速道路を走るかのごとく大海原を進むことができる船に乗れる子どもがいる。その一方で、手漕ぎボートにすら乗ることができず、陸から動けないまま、最終的に温暖化による地盤沈下で生存区域を奪わる子どももいる。もちろん地盤沈下自体は比喩に過ぎないが、グローバル化の波に乗れない非知性的で、一定の能力を持ち合わせない者が、いっそうローカル化して地元を出られなくなっていく様

相[1]は例示できよう。昔は生まれ育った既存の共同体内だけで生活するため、一定の技能を身に付けさえすれば、お金を稼いで生活するには問題なかった[1]。しかしグローバル化の進行に伴う人の移動によって、商売敵が共同体内に移動し、生業を奪われる可能性もあり、更には過疎化によってその地域がいつまでも生活可能な状況であるとも言えない。自分が自由に移動しそして生存するためにも、高い知性や技能が必要であり、何もせずに留まっていては前述のように地域の消滅に飲み込まれてしまいかねない。

表２　社会変容に関わる様々な事象の変化

固体的近代（ソリッドモダン）	項目	液状的近代（リキッドモダン）
神、宗教、伝統、親	生き方の指針	自分
親、親方	ロールモデル	無い
狭い、村	生活圏、活動範囲	広い、世界中
少ない	接する人	多い
少ない、遅い	移動量、速度	多い、速い
緩やか	文化、流行の変遷や発展	早い、突発的
ラジオ、テレビ	メディア	SNS、ネットコンテンツにより多元化
一家に１台（固定）	電話	個人所有（移動可）
一定	ライフコース	多様
年齢、就職、結婚	大人モデル	曖昧
未完成なもの	子ども	無限の可能性を秘めたもの
終身雇用	働き方	転職、中途採用、解雇が当然
するべきもの、周囲の援助有り	結婚、就職	個人の意思と力量
夫に従う	夫婦の姓	自由選択
よくないもの、避けるもの	離婚	個人の意思であり、ありえること
拡大家族	家族形態	核家族、ひとり親世帯、単身世帯
共同体、親族、家族	子育ての責任	家庭、夫婦、個人
決まっている	フツウの人間	決まっていない
男女（セックス）、二者択一	性役割	LGBTQ+、SOGI、多様（虹色）
尊重されず、不自由	個人の意思	尊重され、自由
一様	幸せの形	多様
従うべき絶対的なもの	魔法、宗教	合理性を欠いた非科学的なもの
少ない、想定内	リスク、トラブル	多い、想定外
与えられるもの	アイデンティティ	獲得するもの
ゴール有り	教育	ゴール無し
一定レベルの習得で完成	知性や能力	より高く必要とされ、完成がない
レールに乗せる	教師の仕事	未知の未来への知識と思考を育む
共同体	責任の所在や行動単位	個人
歴史的伝統的な型への一致	指導の方法	過去を疑い、対象の意思を尊重
安定	社会様相	不安定

更に、それは日本という国家規模だけで見ても同様であろう。かつては日本国内だけで経済が循環し、競合する労働者や企業も日本国内のみに存在していた。だが現在は海外から日本に利益を求めて訪れる企業や労働者が増えている。将来的には日本という国が世界の中で取り残され、限界集落のようになることすら予見されうる。したがって、現代は未来の生存競争に勝つため、過去に比していっそう知性や能力が求められる時代となった。現代はそうしたグローバル化できる者とローカル化せざるをえない者が存在するものが同席する２極化した様相にあり、その様相は過度になっているため、転落を恐れる中間層は我が子へと教育熱を持つミドルクラス不安というものを示している[7]。

２、講義内容

2-1 人間関係に執着する子ども達

以上のような時代変化から起因して、子ども達の生活様相、特に人間関係はかつてと比べて大きく変化している。例えば、よく「最近の子ども達の人間関係は希薄化している」という言説を耳にすることがあるだろう。SNS やメディアの発達によって、対面的なコミュニケーションが減少したことを受けて「最近の子どもは社会性が低い」、「ヴァーチャルな世界に没頭して、気遣いができない」等、その未熟さを嘆く趣旨のものが多いのではないだろうか。講義では、このような内容を問いかけ、その背景や実状を示していった。結論を端的に言えば希薄化してはおらず、子ども達の人間関係は狭小化し濃密化し、閉鎖化している。そのため子ども達の関心の圏外に置かれ、彼らから親密な関わりを求められない大人達が自分への軽薄な扱いのみで子どもの様相を判断し、誤認しているに過ぎない。

では表２を参考にしてみよう。かつてであれば子ども達は出生時からアイデンティティが与えられていた。生まれた家や、地域、性別によって、自分が歩んでいくライフコースが決まっており、目指すべきロールモデルも明確に存在した。仮に与えられていなくとも、所謂「日本人らしく」周囲の流れに合わせながら、既存の大人モデルからどれかを選択し、そのモデルの通りに生きていくことで安定して確実な人生を送ることが可能だった。しかし社会が人々に生き方を保証しなくなった現代では、子ども達には目指すべき確固たる大人のモデルは無く、そのためこれからを生き抜く個性[2]が求められる。その反面、学校教育では新しい時代に対応できない旧時代のブラックな校則[8]や、大人の常識に拘留され、理不尽に社会への一体化を求められる。加えて、不安定な時代に安定して生きていくための（辛うじて残されていると考えられている）コースに乗るべく、家庭でも受験等で早くから結果を求められ、失敗が許されない。したがって現代の子どもには心休まる場所は少なく、どこへ行っても息苦しくて負担の大きい世界だと言える。

そしてこのような不安定な子ども達が、唯一救いの種にした相手が、身近な友人であった。子ども達は友人からの承認を得ることを通じて、まだ何者かよくわからず、確固たる自信や居処の無い自分を肯定しようと試みている。そのため暫定的に周囲の人間と同等でいることや仲間になることによって安心し、自分だけが浮いてしまうことを極端に嫌う。マジョリティであることを求め、そうした同質化した群れの中で生活することで人生の先の見えない不安を解消しようとする。時にはマイノリティを否定することで、自分と周囲との絆や自らの正当性を保ち、巧く周囲と折り合いをつけて居場所を確保している。その結果、スクールカースト[9]と呼ばれる人間関係における階級差が存在している。しかし残念ながらこうした人間関係における地位の取り合いはイス取りゲーム[3]であり、地位の転落は人間関係にとってマイナスとなるため、自分と地位の被る人間がいた場合には争わなければならない。つまり周囲は自らの友人にもなり得るが、敵でもある。そのため子ども達はキャラ（仮面）[4]と呼ばれる相手に受け入れらやすい自己像を偽造し、そこに自己欺瞞を感じても、学校以外に社会が無いため[5]、この危うい関係を死守するためにクラスが替わるまで営業マンのように自らを友人に売り込み、顧客と信頼関係を維持するかのように１年にも亘るお友達プロジェクトを生活の中で強いられる。１年で終われば良いが、クラスが替わっても変わらなくても続き、周囲の人間関係が変わると再度地位を構築しなければならない。時には自らの意に反した行動を求められることもあるかだろうが[6]、周囲との関係性のみが自己肯定感を支えているため、息苦しくとも維持せざるをえない。実際に「クラス内で自分の気持ちと違っていても人が求めるキャラを演じてしまうことがある」という質問調査の項目において半数以上がキャラを造って人間関係を維持している層があり、しかもそのキャラには納得していないという事実[10]もある[7]。

2-2 自己肯定感至上主義の弊害

だが、そうした他者承認の希求が彼らの至上目的であり、唯一の自己肯定感を得る方法になっているため、友人にも敵にもなり得る日常の人間関係には安心感を抱きづらい。そしてその不安を打ち消すために、場の空気を読んでノリを合わせて、仲間をシラけさせないようにいつも気を遣わざるをえない[11]。つまり不安感を消すためにコミュニケーションを円滑化するキャラを演出してはいるが、実際にはそうした行動が子ども達自身を苦しめている。自分を守り、効率的に自己肯定感を与えてくれる有益な人間関係を求めた結果、逆に不安感を強め、一人ひとりを孤立させてしまう。そして友人同士のやり取りは濃密ではあるが、上辺だけの当たり触りないものとなる。このように空気の読み合いや演技を繰り返して友達であることを維持しようとしているため、実際には居心地の良い友達関係でさえもなくなってしまっている。

加えて、本来であれば好きなものがあって、それを分かち合う相手を見つけ、その結果、相手が友達になるというかつてのプロセスを、現代の子ども達は遡ってしまっている。つまり友達になりたい（ならないといけない）からその子の好きなコンテンツを知り、それを勉強して友人との共通話題を増やす。そして何と

かそのコンテンツを好きになる（好きにならない場合もあるが話を合わせる）。そのような手順と同じように人間関係も構築されていくので、その場では当たり障りなく予定調和的なやり取りが繰り返される。人間関係をスムーズにしようとその繊細な舵取りに没頭するあまり「私達は、これだけ会話をしているのだから、きっと親友だよね」とコミュニケーションに値する関係であることを互いに確認することの方が重要な関心事になっている[12]。しかしそうした人間関係の様相は、他者から承認されることを第一とした目的志向型のコミュニケーションに陥り、会話をしていて楽しいであるとか、自分が認められているという充実感が得られづらい。内容充実型のコミュニケーションとは異なり、既述のように持続には苦痛が伴う。相手を傷つけないよう気を遣って、地雷を踏まないように、相手に自分を受け入れてもらえるように、細心の注意を払って関係性の維持に努めなければならない。このように友達地獄[13]とまで揶揄される関係の常態化は子ども達を疲弊させ、続けることも離脱することも精神を疲弊させる生き地獄となる。

更には友人に集中するあまり外側の人間関係に配慮する余力を失ったり、気遣いの中で自らの地位を確保して自己肯定感を獲得する人間関係のサバイバルに疲弊したり、過度の気遣いから本音が言えず息苦しさを覚えたり、と様々な弊害も生まれている。例えば対人コミュニケーションの自信の無さから前髪を異様に伸す者、マスク依存症になる者[8]、一人になった瞬間に外界を遮断するためイヤホンと音楽で自己世界に没頭すし、自らの世界の安定を図る者[9]も存在する。

2-3 メディアや SNS の発達による子ども世界の変化

ところで子ども達の世界を変えた大きな要因としてメディアの多様化や SNS の発達が挙げられる。かつてであれば流行やゲーム、TV 番組等、子どもが夢中になる話題はさほど多岐には亘っていなかった。その背景には、ブームを仕掛けるメディア側が使う媒体がラジオそして TV といった具合に支配的に共通話題を作り出していたことが要因として存在する。そして誰もが知っている歌や番組が必ずあり、それによって会話を成立させることができた。だが現在では、インターネットの普及とスマホの個人所有率の上昇によって TV を観ない世代の増加と共に、YouTube やネット TV 等の出現によって、子ども同士間でも興味関心の方向性が多元化してきた。今や見逃した番組はネット上に共有されているし、TV 放送の時間軸に因われず、自らの生活を基軸にして動画や番組を観ることができる。しかしこの状況では従来の方法で人間関係を築こうにも共通話題が見つけづらいため、人間関係が「島宇宙化」[14]した状態であると揶揄された。こうした共通話題や趣味からなる子どもや若者のコミュニティの断片化は 20 年以上前から生じており、現代の子ども達の間ではいっそう過度になったと言えよう。

コミュニケーションにおいて信頼できる共通話題という前提があまりに弱小になったために、「深い」コミュニケーションがリスキーになっている。しかし問題なのは、互いにコミュニケーションできる「共通問題」の不在ではない。問題になっているのは信頼できるコミュニケーション前提が存在しないことであり、「異質な他者」に探りを入れ、共通前提を探り当てる「技術」が存在しないことである[15]。したがって、このような状況が前述した子ども達の居処の無さに拍車をかけ、実際に学校と家庭での居心地の悪さや、人間関係での疲弊を反映するかのように、日本の若者の自殺率は高い[10]。また学校でも、自室でも、家庭でなく、インターネット上こそが自分の居場所であると答える子どもが増えつつある[11]。もちろんネット上という仮想空間が、そうした子ども達の避難所として機能していることは 1 つの救いであることは間違いない。しかし、そうであるが故に自身の SNS やサイト上に攻撃的な言葉を書かれたことが自室や自我を傷つけられたと感じて憔悴し、その相手を現実世界で攻撃し、果ては殺害してしまうという事件も起きている。

加えて SNS の発達はこうした子ども達を更に苦しめることになる。かつては、チャイムが鳴れば学校の人間関係は終わり、翌日登校するまでは自分の時間を確保することができた。仮に、放課後も学校の友人と遊ぶことがあっても、せいぜい陽が沈む頃には終焉し、各々が家庭での生活に勤しむ。夜に会話をすることがあっても、家の固定電話を経由しなければならないので、それほど長時間話すこともできず、例えば男子が女子と話をしたい時は「お父さんが出たらどうしよう」という不安が、行動を慎ませていたこともあっただろう。しかしながら、そうしたかつてでさえ学校を少し休むと「話についていけないのではないか？」という不安から登校しづらくなることや、そうしたことがきっかけで不登校気味になることもあっただろう。

だが、現代では学校が終わっても、陽が暮れても、その人間関係は終わらない。今では少なくない中学校や高校のクラスにはグループ LINE という SNS 上に作られたグループがある[12]。そしてそこでは放課後も学校での会話と同じような目的志向型のキャラコミュニケーションが続く。もちろん少人数や個別でグループを作ってもいよう。そのように秘密裏に作られるグループは、ネット上の秘密基地で子ども達だけでずっと会話をしている感覚であると捉えられるため、友達と四六時中繋がっていられる状況を歓迎する子ども達も

多いだろう。ただ基本的にはそこでの会話も同調が求められ、参加しなければ翌日の教室での疎外感も大きいという焦燥感も随伴する。続けることで関係性が維持されるため、「友達なんだからすぐ返信して」という理不尽な要求にも応えなければならず、その反面、止めた瞬間に孤独へ陥って自分の存在を証明してくるものが消滅する。そのため SNS でも延々とボールの無いキャッチボールを行う行為が繰り返されるに過ぎない。

こうした様相から、子ども達の人間関係は、対人的人間関係から制度的人間関係へ変化した [16] と形容される。彼らは相手に対する感情ではなく枠組みによって行動を規定され、他人行儀で儀礼的な関係性を生きている。それは濃密ではあるが安心した会話ができず、友人であっても自分と相手とをしっかりと結び付けてくれる事象もきっかけも無いため、不確かで不安な関係性である。例えば、日本性教育協会の調査では、2000 年以降中学生以上の女子において「性的関心は無いが経験は有り」という層が２倍になっており [17]、こうした傾向[13]も、恋人関係であるからしなければならないという制度的人間関係の現れであるかもしれない。

他方で、SNS の世界に没入することで疲弊する者もいれば、貧困のせいでクラスの SNS から阻害される者もいる。なぜならば、お金が無ければ友達と繋がることも、遊びに行くことも、遊びに行った先でお揃いの物を買ったりすることできない。前述したように、そうした形式的な同質性から逆行的に友人関係を築く現代の子ども達の様相を鑑みれば、ゲームや遊び同様に、人間関係を構築するためには一定の豊かさが必要になる。実際に貧困等の理由からスマホ等を所持できず、クラスの SNS に参加することが不可能であるためイジメに遭う例もある。そしてようやくスマホを持ったら、今度は SNS 上でイジメに遭ったという例もある。このように貧困問題も相成って、閉鎖的で固定的な教室の人間関係は SNS の登場によって強化されている。

したがって既述のように、大人達の目には現代の子ども達の人間関係が、コミュニケーション能力の不足から希薄化しているように映るかもしれないが、むしろ実態は逆であり、かつてより葛藤の火種が多く含まれるようになった人間関係をスムーズに営んでいくために、高度なコミュニケーション能力を駆使して絶妙な距離感覚をそこに作り出そうとしている [18]。例えば、講義の参加者に、自分達の学生時代に「恋愛感情で好きな相手にどのように告白をするか？」と問うと、多くは「面と向かって」と答えた。だが昨今の傾向として、LINE での告白の方が重くならなくて、気まずくならなくていいという層も増えている点も、こうした気遣いの具現化の１つであるとも伝えた。

このように困難を伴うものの、唯一の自己肯定感の源泉である友人関係の様相を踏まえれば、子ども達が学校での人間関係の維持に執着せざるをえず、その集中力の全てを注ぎ込んでいることで、それ以外の人々への対応が雑になるという冒頭の指摘も自明となろう。

2-4 若者文化及び子ども文化の分析

中盤からは、若者文化及び子ども文化の様相についてここまでの内容を経て発展的に分析していった。例えば昨今では政治家も使用する Twitter では、裏アカウントと言って本来の自分を表す実名のアカウントとは別に、表面上は発言を憚られる内容を呟く用途で使用するアカウントを所持する若者が増えている [19]。そしてそうした２つ以上の全く別人格のアカウントを切り替えるように彼らは、現実世界でも自分のキャラを切り替える[14]。こうした自己像については、ON と OFF の切り替えの様相から辻大介 [20] によってフリッパー型自己 [21] と称され、関係希薄論の想像するような虚無感や孤独感とは逆に充実感も招いている [22]。実際、フリッパー型志向が強い者は、メディアとの親和性が高く、人間関係における自己の切り替えを円滑に行っている [23]。もちろん若年層全体がこうした様相になっているわけではない。メディアを有効活用し、自身のキャラを巧く切り替えることによって日常生活の外側でも自らの承認欲求を満たすため、都合の良い人間関係を構築している層と不可能な層は混在している。眼前の人間関係は従来に比べて狭小化したが、メディアの多様化によって利益を創出できる者と、不可能な者との間では個人差が生じていると言えよう。

またこうした子どもや若者の承認欲求の高まりを示す例として Instagram や Zenly も挙げられる。これらはフォロワー数、いいね数、閲覧数によって、自らへの関心や承認が可視化される。加えて現在地を常に示し、そして確認することで孤独感を和らげて自己肯定感を高める効果もある。反面、こうした数字の高さに囚われ、徐々に数字を稼ぐことに執着する者もいる。そうした歪曲した使い方によって手段が目的化すると、楽しいはずの行為を純粋に楽しめなくもなる。例えば、数字を稼ぐために楽しいフリをして、充実している自分を演出するために仲のいいフリをする。そしてそれを画像や動画に残す。時間が積み重なって思い出になったり、その瞬間の写真を撮ったりするのではなく、写真を撮るために行為をして、思い出にするために楽しいことをする。「思い出を作ろうね」という言葉に違和感を得るのは、充実していれば苦労した日々も何気ない日々も思い出になるからであり、本当に楽しければ写真を撮っている暇も無いほど夢中であるからなのだろう。ただ写真も含め、そうして可視化された何かにすがらなければ自分の存在が消失してしまうという

他者からの共感や承認を欲する孤独、つまり生きづらい社会でもがいている姿も看取できる。もちろんZenly、Twitter、InstagramはLINEほど子どもや若者が全員等しく使っておらず、個々の性格や趣味そして学校での所属グループによって頻度や活用度合いが異なる。またZenlyやLINEは現実の関係性に志向しているが、InstagramやTwitterは見知らぬ相手にも開かれている。しかしどれも承認の可視化であり、こうした機能で子ども達が安心感や満足感を得ていることも事実である。

例えば昨今話題に上がるバイトテロの動画もこうした背景から生じる。後先考えず、とにかく「こんな自分を見て欲しい」という承認欲求の記号化と刺激の希求から投稿し、炎上する。また将来について特定の夢を掲げず「とにかく有名になりたい」と言う子どもがいる点も、こうした傾向であろう。現代の子ども達は周囲の人間から自分が「見られていないかもしれない」ことによる「不安」の方が強まっており、周囲の眼差しから開放されることによってではなく、むしろそれを心ゆくまで浴びることによって、自分の存在を確認したいという欲求の方が強くなっている[24]。例えば前述したように興味も無い性体験を済ませる若者がいる。また2000年以降生まれの女子層のデート経験率は旧世代に比べて高い[25]。こうした傾向は、恋人がいることや経験があることが魅力的な自己演出に繋がるからであるとも考えられる。実際、性的経験や恋人の有無はスクールカーストの地位にも影響する[26]。

だがこうした恋人も含めて、SNSやアプリで目的志向的に造られた制度的人間関係は、前述のように信頼関係が積み重なってはおらず、不安定で空虚な関係に過ぎない。楽しそうな写真や親密に見せかけた会話によって友達関係であることも、性的接触やお揃いの指輪等で恋人同士であることも、SNSの数値が高いことで自身が魅力的な人間であることも、自分に言い聞かせて安心するための材料に過ぎない。そしてその全てには信頼できる安定的他者は存在せず、相手が自分を求めていてくれているんだという錯覚や思い込み[15]で成立している。つまり他者とやり取りをしているようで自分とやり取りをしているに過ぎず、自己完結の孤独な世界を生きている。どれだけSNS上に友達がいても、本音や悩みを話して受けとめてくれる相手は存在せず、大丈夫だと呪文を唱えることしかできない。

こうした自己完結の様相は自己再帰的コミュニケーションであると形容できる。もちろん前述のように巧く切り替えてやり過ごせる者も存在するが、そもそも造ったキャラが環境に馴染まなければ承認されたことにはならない。なりたい自分を演出しても、それになれるかどうかは周囲との関係性に左右される。そのため役割取得を目指そうと造った自己が乱立し、どれが本当の自分かわからないという主我（I）と客我（me）の齟齬も生じる。G.H.ミードによれば、Iは他者の態度に対する有機体の反応であり、meは人が自ら想定する他者の態度の組織化された組み合わせである。他者の態度は組織化されたmeを構成し、次に人はそのmeに対してIとして反作用する[27]。本来、IとmeがIが相互影響して人格を作る[28]が、統合されないと不和も生じる。各々が単独で自己を構成できず[29]、meやキャラだけが認められても、Iが満足しなければ安心できない。また巧くやり過ごす者は、切り替えるmeをIが制御可能な状態に置いている限り問題は生じないが、それが出来なければ、自己崩壊を起こし、何をやっていけば自分は周囲に認められるのかわからなくなる。

そのようにガイドも術も無くした者達はグローバル化の動きに反するように、最終的にグローカル化する。冒頭で論じたように、伝統離反が相当な程度進み、それに伴って生きる意味の空白化も進んできたからこそ、その反動としての伝統回帰が始まり、共同体への憧憬も強まっている[30]。そのため居処の無さから地元に拘ったり、女性であれば配偶者となる相手姓に改姓したりして、かつての神に相当する自分の大きな後ろ楯を得ようと試みる[16]。つまりルネサンスから啓蒙主義への流れによって、神という絶対的な存在からの解放（脱魔術化）がなされたにも拘わらず、それに逆行するように現代を蝕む不安から逃れるべく別の絶対的なものに依存する再魔術化が生じた[1]。ただ実際に占いや宗教を信じる若者は多い[31]が、それは自らの運命を変えるための手段ではなく、その宿命を知るための手段であり[32]、自らの生の根拠探しをして、宿命の手助けをする変更不可能な運命[33]として魔術を求めている。このように安住の地の喪失を生きざるをえない若者達は、失われた安住の地の復活を求めて解決を希求するため[34]、非合理的なものへとすがって必死に逆行[17]している。

2-5 多元化そして液状化する性役割と家族観

これら自らの意味づけを必死に試みている子どもや若者の世界を理解する中で、もう1つ大切なものとして性役割の変化が挙げられる。かつては男女のモデルの分離は明確であったが、最近ではLGBTの認識も広まり「こうであるべき」という旧社会的認識が崩壊しつつある。従来は生まれた瞬間に性器の形状のみで望ましい性格や振る舞いを決めてきた[18]が、それは酷く貧困な発想であり、不用意に「女なんだから、男なんだから」という言葉を使う危険性を認識すべきであろう。例えば、児童であれば「お姫様ドッジボール」が挙げられる。こうした遊びを不用意に用いることはジェンダー差の再生産に繋がりうるし、そもそもLGBT

にとっては不快で違和感を覚えるものになるだろう。

そもそも、こうした性に関する理解はLGBTで終結させるべきではなく、少なくともLGBTQ+として認識すべきであろう。例えば「LGBTばかりになると国が亡ぶ」と発言した政治家は、LGBTの本質や、Q+の人々の苦しみに対する理解が欠けている[19]。まずLGBは、性志向（セクシュアリティ）であり、TQは自認する性や性志向と身体との不一致や不明さ（ジェンダーの課題）である。しかもトランスジェンダーはM to FやF to Mとして区別できるものの、その様相には個人差がある。またインターセックス[20]（間性）、アセクシュアル（無性愛）、エックスジェンダー（性自認が日によって変化もしくは不明）をはじめとする+に該当する人々の存在も認知する必要がある。総じて言えば、男子に男性器があるという理由だけで「お前はどんな女子が好きなんだ？」と問うことが多層構造のセクシュアルハラスメントであることがわかる。その子は、偶然に男性器を備えているに過ぎず、エックスジェンダーやゲイ、またはアセクシュアルの可能性もありうる。果てはインターセックスかもしれない。こうした性の問題に対する寛容さは、若年層の女性ほど寛容かつ理解的な傾向が高い[21]ため、逆に年配の男性指導員にとっては注意喚起が必要となる。前述した政治家の発言に代表される旧世代の男女２分法を強要することは、彼らの存在を否定することになる。加えて未婚や結婚子無しの人々の生き方を否定するのみならず、結婚したくても出来ない人々、子どもが欲しくても不妊や貧困で授かれない人々を中傷することにもなる。

そしてそのような多様性を鑑みて登場した指針がSOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）と呼ばれる性志向と性自認を示すものである。これは、セクシュアリティとジェンダーを別次元で扱うため、従来よりも細分化した認識が可能となる[22]。例えば、TVで「オネエタレント」と一口に言っても様々な人がいるように、全員の性志向や性自認がそれぞれ異なるが、それを整理することができる。加えてポリアモリー（複数愛）と呼ばれる新たな恋愛形態[35]や、それを活かした家族形態を取る人々も出現している。実際にレズビアンのカップルとゲイのカップルが４人で新しい形の家族を営んでいるケースもあり、複数の男女で家族を構成して、それぞれが家族に合わせた役割を担っている[23]。そのため婚外子の容認[24]も含めて新しい家族観への理解が進めば[25]、前述の発言が時代遅れやLGBTQ+への認識不足であることがわかる[26]。

したがって、パートナーシップ制度[27]を認める自治体が増えつつある点、３組に１組という離婚率の上昇によりひとり親世帯が増えている点、選択的シングルマザー[28]の増加等で多様な家庭がある点、を理解して保護者や子どもに接する必要がある。そもそも日本の家族観だと認識されがちな血縁による家父長制は、明治政府によって近代化の過程で急進的に進められたもの[36]であり、そうした恣意的に行われた政策や教育[29]によって固定化した考え方を相対化する必要がある。近代化の中で女性を家に閉じ込め[30]、貞淑な女性像や母性神話を造り出した[37]ことが性教育の遅れ[31]や女性の社会進出の足枷となっている[32]とも言えよう。そのため今後は、性や家族といった既存の価値観を改めることが求められる。特に、指導員は学習指導要領に拘束されていないため、性交渉や啓発活動に偏重した性教育ではなく、広義の性教育に関する知識を活用することが可能である。当然、保護者の了解と協力が求められるが、学校では不可能な実践も具現化できよう。

３、終わりに

本稿では、学童保育指導員研修における専門研修での講義「現代子ども論」のうち「人間関係と子ども世界（主に子どもの人間関係、若者文化、メディア、性教育を中心に）」に関する内容を報告してきた。子どもや若者の世界は、時代の変化と共に大きく変容しており、大人達がかつて生きていた世界とは全く異なるものになっていることが理解されたようだった。

そうした旨を踏まえ、講義の終わりには「そんなことでは社会では通用しないよ？」と学校の先生や指導員をはじめとする大人が無意識で口にする「社会」とはどのようなものなのかを今一度考え直す必要性について注意喚起した。特に、昨今学童保育指導員には教員経験者が増えているが、多くの教員は大学時代に就活すらしたことなく、社会の様相に対して無頓着な傾向もある。また、そうした大人達がイメージする社会とは、かつて自分達が生きていた社会であり、現在の子ども達が生きている社会とは一線を画している。例えば、かつてであれば「ゲームばかりしていてはロクな大人にならない」と言われていたが、現代ではゲームが卓越して巧ければプロゲーマーとして生きていける。また学校での勉強だけに秀でていたとしても、ハイパーメリトクラシー化する現代では、コミュニケーション能力をはじめとする多様な資質が入試や就活、またキャリア形成に関わる様々な場面で影響するので、所謂ガリ勉では生きていけない[38]。そのため、自分達の古い感覚[33]で子どもの主体性や可能性を奪わないことを強調した。そして現代は予想不可能な時代にあるため、子ども達の世界を理解して子どもの指導にあたり、自己研鑽を積んでいくことが求められる。その折、指導者自身が子ども達からも学び、自ら未知に対応していくこと、そして未知の世界であることを子どもに伝えることが求められるだろう。

引用文献

1）玉木博章：学童保育指導員研修における講師活動の報告（２）－「児童への接し方（倫理道徳面）」に関する講習（社会と子ども観の変化から）－．瀬木学園紀要，第 14 号，64（2019）．
2）玉木博章：学童保育指導員研修における講師活動の報告（１）－「いじめや虐待への対応」に関する講習（貧困、現代社会、学校の様相から）－．瀬木学園紀要，第 14 号．55-62（2019）．
3）Z.バウマン：森田典正訳，リキッド・モダニティ―液状化する社会―．大月書店（2001）． Z.バウマン：長谷川啓介訳．リキッドライフ―現代における生の諸相．大月書店（2008）．
4）A.ギデンズ：秋吉美都，安藤太郎，筒井淳也訳．モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会．ハーベスト社（2005）．
5）U.ベック：東廉，伊藤美登里訳．危険社会 新しい近代への道．法政大学出版局（1998）．
6）玉木博章：学童保育指導員研修における講師活動の報告（２）－「児童への接し方（倫理道徳面）」に関する講習（社会と子ども観の変化から）－．瀬木学園紀要，第 14 号，63（2019）．
7）G.ビースタ：藤井啓之・玉木博章訳．よい教育とはなにか―倫理・政治・民主主義. 白澤社, 89-90（2016）.
8）荻上チキ，内田良：ブラック校則　理不尽な苦しみの現実．東洋館出版（2018）．
9）鈴木翔：教室内（スクール）カースト，光文社新書（2012）．
10）本田由紀：若者の気分 学校の空気. 岩波書店，55（2011）．
11）土井隆義：友だち地獄－「空気を読む世代」のサバイバル．筑摩書房，27（2008）．
12）土井隆義：友だち地獄－「空気を読む世代」のサバイバル．筑摩書房，204（2008）．
13）土井隆義：友だち地獄－「空気を読む世代」のサバイバル．筑摩書房（2008）．
14）宮台真司：制服少女たちの選択，講談社，246-247（1994）．
15）宮台真司：制服少女たちの選択，講談社，268（1994）．
16）鈴木謙介：ウェブ社会のゆくえ――〈多孔化した現実のなかで〉，NHK 出版，122（2013）．
17）日本性教育協会：「若者の性」白書 第８回青少年の性行動全国調査報告．小学館，41-43（2019）．
18）土井隆義：友だち地獄－「空気を読む世代」のサバイバル．筑摩書房，125（2008）．
19）一戸信哉：教育「発信者」としての大学生はどうあるべきか．藤代裕之編著．ソーシャルメディア論・改訂版 つながりを再設計する．青弓社，218-219（2019）．
20）辻大介：若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア．北田暁大・大多和直樹編著．子どもとニューメディア．日本図書センター，276-289（2007）．
21）辻大介：若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア．北田暁大・大多和直樹編著．子どもとニューメディア．日本図書センター，285-286（2007）．
22）辻大介：若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア．北田暁大・大多和直樹編著．子どもとニューメディア．日本図書センター，286（2007）．
23）辻大介：若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア．北田暁大・大多和直樹編著．子どもとニューメディア．日本図書センター，287（2007）．
24）土井隆義：友だち地獄－「空気を読む世代」のサバイバル．筑摩書房，134（2008）．
25）日本性教育協会：「若者の性」白書 第８回青少年の性行動全国調査報告．小学館，35（2019）．
26）鈴木翔：教室内（スクール）カースト，光文社新書，34-35（2012）．
27）G.H.ミード：河村望訳．デューイ＝ミード著作集⑥　精神・自我・社会．人間の科学社，215（1995）．
28）G.H.ミード：河村望訳．デューイ＝ミード著作集⑥　精神・自我・社会．人間の科学社，220（1995）．
29）G.H.ミード：河村望訳．デューイ＝ミード著作集⑥　精神・自我・社会．人間の科学社，214（1995）．
30）土井隆義：「宿命」を生きる若者たち 格差と幸福をつなぐもの．岩波書店，63（2019）．
31）土井隆義：「宿命」を生きる若者たち 格差と幸福をつなぐもの．岩波書店，69-73（2019）．
32）土井隆義：「宿命」を生きる若者たち 格差と幸福をつなぐもの．岩波書店，78-79（2019）．
33）土井隆義：「宿命」を生きる若者たち 格差と幸福をつなぐもの．岩波書店，78（2019）．
34）橋迫瑞穂：占いをまとう少女たち 雑誌「マイバースデイ」とスピリチュアリティ. 青弓社, 48（2019）.
35）深海菊絵：ポリアモリー 複数の愛を生きる．平凡社（2015）．
36）荒川和久：結婚滅亡「オワ婚」時代のしあわせのカタチ．あさ出版，59-62（2019）．
37）古市憲寿．保育園義務教育化．小学館，25-26．89-104（2015）．
38）本田由紀：多元化する「能力」と日本社会―ハイパー・メリトクラシー化のなかで．NTT 出版，28-30（2005）．
39）玉木博章・藤井啓之：教育における〈時間-空間-人間関係〉問題に関する研究(２)－チクセントミハイ

による「フロー」概念を手がかりにした生活指導の視点からー．愛知教育大学研究報告，第 62 輯（教育科学編）．107-108（2013）．
40）本田由紀：若者の気分 学校の空気．岩波書店，66（2011）．
41）本田由紀：若者の気分 学校の空気．岩波書店，108-112（2011）．
42）土井隆義：「宿命」を生きる若者たち 格差と幸福をつなぐもの．岩波書店，37-48（2019）．
43）藤井啓之：ツルンとした世界のなかの「家なき子」子どもたちにホームをつくりだす．教育科学研究会編集．教育，2018 年，9 月号．かもがわ出版．5-6（2018）．
44）一戸信哉：教育「発信者」としての大学生はどうあるべきか．藤代裕之編著．ソーシャルメディア論・改訂版 つながりを再設計する．青弓社，215-230（2019）．
45）伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子：女性学・男性学 ジェンダー論入門．有斐閣アルマ，102-103（2019）．
46）伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子：女性学・男性学 ジェンダー論入門．有斐閣アルマ，103-105（2019）．
47）伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子：女性学・男性学 ジェンダー論入門．有斐閣アルマ，104（2019）．
48）荒川和久：結婚滅亡「オワ婚」時代のしあわせのカタチ．あさ出版，25-26（2019）．
49）JOICFP．2019 年「ジェンダー・ギャップ指数」日本が 110 位から 121 位へ（153 ヵ国中），(2019).
https://www.joicfp.or.jp/jpn/2019/12/19/44893/

注

[1] 研修には新任研修、基礎研修、専門研修の３種類がある。新任研修は指導員歴３年まで（希望者は３年以上も受講は可能）の者、基礎研修は指導員歴３年以上もしくは新任研修を受講した者が対象となる。そして専門研修は、指導員歴３年以上で基礎研修を受講した者が対象であり、最も応用的な内容となる。

[2] この個性はあくまで大人や学校にとって都合のいい個性であることにも留意したい。例えば、プロ野球選手を目指すことは健全という認識がされる反面、YouTuber には難色を示す大人が多い。また男子高校生が囲碁将棋の大会で優勝することに賛美が送られるが、女子高生が麻雀大会で優勝することには嫌悪感を示す大人もいる。筆者の友人には通信制高校時代に麻雀大会で優勝し、中国大会にゲスト出演した経験を持つ女性がいるが、高校からの扱いは散々だったようだ。

[3] こうしたマウントの取り合いは大人世界でも生じている。狭く閉鎖的な人間関係しか持ち合わせておらず、そこでの価値観に閉じ込められると、その場所に執着し、椅子取りゲームを助長させることになる。

[4] キャラの偽造や空気を読む行為に関する更なる考察に関しては玉木・藤井 [39] が詳しい。

[5] 逆に、家庭と学校以外に子ども達へ豊かに社会を与え、学校を相対化することも今後の教育課題でもある。

[6] 例えば、この点に関連して本田由紀は中学２年生を対象にして量的調査を行っている。本田はクラスの友達に満足していたりクラス内地位が高かったりすることが、学校は楽しいと肯定的に感じることに繋がっていると述べる [40]。また大学進学希望の意思が低い中学生ほど友人と同じ高校に進学したがる傾向も示している。加えて、クラス内地位の低い者ほど友人と同じ高校に進学したがらない傾向も示されている。本田はこのような進路傾向について、学力競争を勝ち抜いて得られる高い地位のリアリティが薄れ、現在安心できる仲間との関係を大切にしたいという思いがあると指摘する [41]。しかしこの結果は、子ども達が友人との関係性やそこから得られる自己肯定感の獲得をかなり優先した依存傾向や、努力しても良い未来が望めない高原期特有の人間関係と進路傾向 [42] であるとも言える。

[7] 調査は、とても当てはまる、まぁまぁ当てはまる、あまり当てはまらない、全くあてはまらない、の４つの選択肢に対して、男子 33.1%、女子 35.9%が、当てはまる２つの選択肢を選んでいる。更に内訳を階層別（クラス内での人気を高、中、低の階層３段階に分け、「いじられキャラ」をプラスした４段階）で分析すると男子では高位で 37.3、中位で 22.6%、低位で 44.2%、いじられ層で 69%が当てはまるを選んでいる。一方女子では高位で 31.8%、中位で 30.4%、低位で 51.9%、いじられ層で 47%となっている。男子いじられ層と女子低位層が 50%を超えている [13]。

[8] 自らの表情を隠せるために恥ずかしくない、もしくは自信が持てるといった理由で年中マスクをつける。こうした背景には、自らの顔に対する劣等感もあろう。

[9] アスリートが試合前に気持ちを整え、ネガティヴな感情を和らげるために音楽を聴く行為と類似する。例えば、自信の無さから道行く他人が自分を蔑んでいるように感じられることがある。それを避けるため好きな音楽で自分を満たし、快適な世界を保とうという意図がある。だが昨今のイヤホンの高品質化等、音楽をいつでもどこでも持ち歩く風潮、イヤホンを外して外界に目が向けられない風潮は、自己世界を埋めなければ空虚だと感じられる程の自信の無さや、自分に何も与えてくれない外界への失望感であるとも看取できる。

[10] 例えば藤井啓之は、2018 年 6 月に厚生労働省から発表された『自殺対策白書』における 15～39 歳の死因の１位が全て自殺であること、また国際比較においても先進国の 15～34 歳の死因が１位なのは日本だけであり、その数値も他国の２倍以上（例えば、イギリス 6.6%、ドイツ 7.7%、フランス 8.3%、カナダ 11.3%、アメリカ 13.3、そして日本 17.8%）やそれに近い数値であることを挙げ、日本社会は子どもや若者にとって生きづらい社会であると指摘する [43]。

[11] 2017 年場版の「子供・若者白書」の特集は「若者にとっての人とのつながり」であり、内閣府が 2016 年 12 月に 15～29 歳の 6000 人を対象にしたインターネット調査の結果を示した。「自分の居場所だと思う」割合について、そう思う、どちらかと言えばそう思う、

の合計が、自分の部屋 89,0%、家庭 79,9%、インターネット空間 62,1%、地域 58,5%、学校 49,2%、職場 39,2%であった。もちろんこの結果は抽出対象に年齢的偏りがあるため生じた結果であり、12～14 歳を対象に加えれば職場の数値が下がり、学校が上がることが想定できるため、この結果だけでは判断は困難である。またそもそも自室を持っていない子どもも増えるだろう。だが、インターネット空間を居場所だと感じている若者がかなりの数存在することは指摘できよう。

[12] 高校や大学では入学式前にはもう入学者のグループ LINE や Twitter があって人間関係が構築され、4 月には既に関係性の格差が生じる事例もある。

[13] 相手を失いたくない、関係を維持したいが故の性的接触の可能性や、性の商品化も影響していよう。

[14] 一戸信哉 [44] は、2015 年の電通総研による「若者まるわかり調査」を引用し、現実社会での人間関係の中に、正確や趣味嗜好等を含めたキャラが複数あり、それに応じて自分から共有する情報を使い分けたいという気持ちが定着しており、そのキャラの一部としてヴァーチャルな別人格として考えられていたものが含まれると述べる。なおツイッターで複数アカウントを持つ高校生は 62.7%、大学生で 50.4%であり、高校生男子は 2.7 個、高校生女子は 3.4 個、大学生男子は 2.6 個、大学生女子は 2.5 個とされる [19]。

[15] 例えば Twitter で呟くことによって気持ちが晴れるという現象は一人言に過ぎないが、誰かに受けとめてもらったという錯覚に陥る自己再帰性の一例である。

[16] 若者の右傾化や人気アイドルのファンコミュニティも同様の作用があると考えられる。

[17] 神曲、神動画、神回と何でも軽率に神格化する若者の傾向も再魔術化の一種であると看取できる。

[18] 生まれた瞬間に男性器があれば、青い物を与えて男らしく教育する。また女性器があれば桃色の物を与え、女らしく教育するという性器の違いに基づいた風潮がある。しかし青を与えられ女児は青が好きになるし、その逆に桃色を好きになる男児もいる。特に、男児は戦隊ヒーローの影響で赤が好きになるが「女の色だから」と嘲笑される傾向もある。またそのように強いヒーローへの憧れを持たされた男児は、大人になった時に誰かのヒーローになれない弱い自分を嫌悪することもある。そして力を見せつけるために、故意に弱者を襲って自己肯定感を上げようと目論むかもしれない。逆に、どれだけ仕事ができて社会的に評価されようと「1 人の男に選んでもらえない自分は女として価値がないのではないか？」と本来とは異なるシンデレラコンプレックスに苦しむ女性もいる。このように幼少期からの性器判断に基づいた刷り込みで男女は形成され、それが彼らを後に苦しめる。またそのような男女は体と心に違和感は少ないが、偶然ある性器を有した体を持っていただけで受けた刷り込み教育によって、トランスジェンダー等々の人々は更なる自己否定に陥る。翻って、例えばアニメの世界では、キューティーハニー、セーラームーン、プリキュアといった戦う女の子が誕生したが、加えて昨今では男の子のプリキュアも誕生している。また戦隊ヒーローでは青、白、黄を男女両方の性別に使っている。ジャニーズアイドルではメンバーカラー文化の旺盛の中で桃を担当する者が増えてきた。近年、赤を担当して女が一時的にリーダーになる、また女が緑を担当する戦隊もある。それを下地として今後は桃を担当する男の戦隊も望まれる。また性の多様性を示す色として虹色が用いられている。

[19] B であれば生殖的な性交渉もする。他方で血縁を重視した家制度や子どもの誕生に拘泥する必要はない。

[20] インターセックスは、DSD（Disorder/Difference of Sex Development）とも呼ばれ、心の問題ではなく男女両性の身体機能を持つ人々を示す。両性の性質を持つため体が機能不全を起こし、性分化疾患とされる。

[21] 例えば 10 代男子に対して、好きな女子が「レズビアンなんだ」と答えると「俺が男の良さを教えてやる」と言う傾向にあるが、女子に対して好きな男子が「ゲイなんだ」と答えると「それなら友達として仲良くしよう」という選択をする傾向が高いとされる。

[22] ミルトンダイヤモンドによる PRIMO という指標もある。ぞれぞれ、gender Pattern（らしさ、性別役割や期待）、Reproduction（生殖）、gender Identity（性自認）、sexual Mechanism（性機能や仕組み）、sexual Orientation（性的指向）を示す。

[23] ポリアモリーの家族形態は多様である。例えば 3 人の男と 3 人の女で生活した場合、仕事に重きを置きたい者、家事や育児に重きを置きたい者、また子どもが欲しいが体質的に不可能な者、子どもは欲しいが育児より仕事を優先したい者、と様々なライフニーズを持つ者も、家族との熟議と了解の末、役割分担によってそれらを実現することができる。明治の家族観では、不妊症の男女や病気がちな男女にも、性役割が課されてしまう。不妊をはじめ、担うことが不可能な場合もあるが、多様な家族の協力により不妊症でも親になれる。しかも里子による見知らぬ子どもではなく、共に暮らす家族の子どもである。こうしたポリアモリーの存在は、核家族化やひとり親世帯化のように縮小した家庭だけに丸投げになった子育ての責任を分担する糸口にもなる。これはかつて存在した地域共同体を別の形で再生する新たな構図であるのかもしれない。

[24] 当然日本は海外に比べて婚外子は僅かであるが、若い世代には婚外子を容認する人々も存在する。

[25] 他方でアウティングの被害もあり、他人から見れば問題ではないことも、本人にとっては自己否定をするほどの問題である点にも留意する必要がある。

[26] 少子化問題は 1 世帯に子どもが複数いないことが問題ではなく、DINKs（Double Income No Kids）という結婚共働きでも子どもを産まない、もしくは困難な不妊治療に取り組んでも授かることのできない世帯の増加や、未婚率の増加が要因でもあろう。だが、そうした人々の人生選択も当然尊重されるべきである。

[27] ただし、未だに法的拘束力が弱いため、生命保険金や遺産相続、病院手続きをスムーズにするため養子縁組をすることによって家族になるカップルもいる。

[28] シングルマザーに関しては、60%にも及ぶ貧困率や、高い非正規雇用率、そして子育て世帯平均と比較して 3 倍近い所得格差に留意する必要がある。また虐

待死は子どもが幼いほど生じやすく、加害の親にはそもそも支援が無く孤独な傾向がある点も看過できない。

[29] 例えば、伊藤公雄らは柳父章の『翻訳語成立事情（岩波新書 1982 年)』を援用しながら、日本には明治時代まで恋愛は存在しなかったと指摘しつつ、日本語での「恋愛」という言葉の登場は、明治以後英語の Love の翻訳語としてものであり、それまでの親密な感情は本訳語の「恋愛」と異なるとも指摘する。そして柳父の言葉を援用し、Love（恋愛）は「恋」とか「愛」とか「情」や「色」といった不潔の連感に富める日本の通俗文字とは違う、清く正しく、深く魂より愛するという意味を持っていたと説明する[45)]。

[30] 奥さん、家内、嫁、妻の呼称はこの点に関連する。古くは十二単、区分田制度も関連。

[31] 伊藤らは、日本社会において異性との性的関係を持っていない女性を示す言葉として「処女」という概念が広がるのは明治末から大正にかけての時期であったと述べ、それ以前の「処女」とは単に若い女性を意味していたに過ぎず、逆に「童貞」という言葉は男に限定しない性的関係を持たない男女を意味する性的中性な言葉だったと指摘する。そして西洋人から見れば日本人は極めて性的に自由な文化であると映っており、その背景には西欧に比べて日本女性に私有財産があったという伝統が存在していることによって、離婚も含めて男性との関係が終わっても自活できる力があったことから起因する。だが平安末期から鎌倉時代にかけて徐々にそうした様相は変化し、戦国時代になっても西欧と比べれば一定の財産権もあったものの、明治時代になると民法等の法的規制によって女性の財産権は男性に奪われ、この頃から男性と性体験の無い女性を処女と呼ぶようになったと説明する[46)]。もちろん、かつても好き勝手に相手を取っ替え引っ替えなどしておらず、好きではなくなったら自然に別れるといったことも当然であった[47)] とされる。つまり近代化の過程で西洋諸国に合わせる形式で、民法によって女性は無権利状態にされ、まるで女性を男の所有物と見なす傾向が処女信仰や純潔教育を生み出したと考えられる。これによって、一生のうちで排卵できる卵子の数に限りがあるにも拘らず、女性が主体的に妊娠をコントロールすることが今日でも懸念される傾向にあり、ピルの服用や避妊パッチの周知は進んでいない。またピルには月経困難症の緩和、更に卵巣癌や不妊の予防にも効果があるが、日本のヘルスリテラシーは低い。実際に中高生の妊娠の多かった日本のある地域でこうした性教育に力を入れたところ、数年で改善したという報告があるにも拘らず、古い偏見は改善しないまま、未だに先進国の中でも日本は性教育後進国とされている。

[32] 総人口の 7～8%に過ぎなかった武士世界にある男性中心の婚姻社会を明治以降に庶民に導入した一連の変化が、現代の男尊女卑の傾向に影響している[48)]。例えば、多く男性が使用する育毛サプリメントは軽減税率の対象であるが、生理用品は対象外であったり、包茎手術が保険適用内の病院がある反面、避妊目的のピルは保険適用外であったりする。加えて、常に男女の２分法で論じることは困難だが、バイアグラの認可はすぐ降りた反面、それに比してようやく降りたアフターピルの認可はオンライン処方に限られる。また同様に男女の２分法で論じ切れないが、痴漢や強姦の犯罪者が再犯防止治療を受ける場合に金銭的補助が得られる自治体がある一方で、PTSD を負った被害者は自費で精神科等に通う傾向にある（もちろん男性被害者が存在することも考慮するべきではある)。実際に 2019 年の世界ジェンダーGAP ランキングは 121/153 位と低い。過去は、2018 年 110/149 位、2017 年 114/144 位、2016 年 111/144 位、2015 年 101/145 位、2014 年 104/142 位、2013 年 105/136 位、2012 年 101/135 位、2011 年 98/135 位、2010 年 94/134 位、2009 年 101/134 位、2008 年 98/130 位、2007 年 91/128 位、2006 年 80/115 位と参加国が増えるにつれて自然に低下する傾向にある。こうした要因には政治、経済、教育、健康の４分野のうち政治（過去最高 83 位）と経済（過去最高 83 位）におけるスコアが日本では非常に低いことが挙げられる。更に、この最高順位は、2006 年のものであり当時は参加国が 115 ヵ国と現在より少ない。翻って健康スコア（過去最高１位であり 2006 年、2010 年、2011 年、2017 年に記録）や、（過去最高が 2006 年の 60 位なので、さほどスコアが高いわけではないが) 18 歳までの教育に関しては他国と比べても日本は優秀なスコアを示している[49)]。具体的には、医学部入試における女子の排除、生理による不調への不寛容、痴漢や強姦の軽視とワンストップ支援センターの経費や人員の削減、夫婦別姓への根強い反対、マナーとしての化粧をはじめ女性へ美を求める傾向、その反面高額な化粧品や下着等によってかさむ出費、結果レディースデーを作らないと消費活動への意欲が沸かないほどの賃金格差、メガネやマスクの着用禁止、パンプスの強要、女性専用車両バッシング、出産子育てによるキャリアの中断、不妊が女性の責任だと思われる傾向（実際の精神的負担も大きい）等々が挙げられる。こうした兆候に対して歴史的には平塚らいてうらを中心（当時は女性に選挙権が無く女性の選挙権獲得は戦後）とした運動や、ウーマンリヴ運動、最近では Me too 運動や Ku too 運動、フラワーデモ、with yellow 運動、リプロダクティヴヘルスライツの制定といった動き、更には袴、ブルマー、もんペ、ミニスカートの着用が挙げられ、女性差別とその運動には枚挙に暇が無い。翻って「男らしさ」を男性に望む風潮、男性の育休の取りづらさや、男性から見た生殖権、DV をはじめとする男の性被害という男のジェンダー的課題(男性学の観点)に関しても当然留意すべきである。

[33] 生活面における例を挙げれば完食指導がある。給食ハラスメントという言葉もあるように、アレルギーのある子どもに配慮しないことは命を奪う暴力となる。